

## クローディア

「ただいま」

雅彦が玄関の扉を開けるが出迎えは無く、薄暗い廊下の奥からは花瓶を落としてしまった様な子供の泣き声と、慣れない子守りに悪戦苦闘する新米ママさん……愛しき我が妻綾乃の、何とか赤ちゃんをなだめようと必死にあやす声が、複雑に絡み合って廊下に漏れ伝わって来る。

我が家に待望の長男が誕生して以来、綾乃は子育てに専念するべく覚悟を決めて、まだ誕生して一ヶ月と言う、小さくも弱く硝子の様に脆い息子の育児と格闘していた。

最初の帰宅の挨拶で気付かれなかった事をこれ幸いと、雅彦はわざと足音を立てない様にすり足で廊下を通り抜け、綾乃がいるであろう居間に繋がる扉を、これもまたなるべく音を立てない様に、細心の注意を払ってゆっくりと開ける。

ちょうど雅彦に背を向ける様な形で、居間のソファに腰掛けながら赤ちゃんをあやす綾乃を見て、これ幸いと背後から近づき、綾乃の耳元で『ただいま』と囁いて、そのまま綾乃の頬に軽くキスをする。

「ばっ！ 止めてよ、びっくりした」

綾乃が露骨に驚いてみせる。

綾乃の驚いた顔に我が子も驚いたのか、最前まで煩がっていたにも関わらず、目をまん丸くして『何があったの？』と驚いた様にきょとんとしている。

「しかたないさ。職場の連中にも散々馬鹿にされたけど、俺は例え子供が生まれても綾乃にはぞっこんなんだから……」

「まったく、いい年して子供の前で何言ってるの？」

「確かに、子供が生まれた事はとても嬉しいし、子供はとても可愛いんだけど、綾乃が子供に掛かりつきりってというのが、ちょっとな」

「もう雅彦も子供じゃないんだし、子供が生まれたり手がかかるって言うのは、予め分かっていた事でしょう？」

自分が一日中慣れない子供の世話を追われていると言うのに、夫にまで構う暇がないと言った風に、綾乃は少々不機嫌そうに答える。

「まあ、話は最後まで聞けよ。綾乃、すっかり忘れてるだろ。誕生日」

「あ、そっか」

綾乃が言われて初めて気付いたと言う風に、慌ててカレンダーに視線を向ける。

「何だ。自分の誕生日忘れてたのか？ 俺は毎年この時期になると、プレゼントに何を渡そうとか、一ヶ月くらい真剣に悩んでいるのに」

「その割には、普通女の子が欲しがりそうなプレゼントなんて、一回もくれた事がなかった癖に……」

「そんな事言うなよ。毎年真剣だったんだから」

「でも、なんでこんなプレゼントになるの？ って理由を聞くと、なんだかちょっと笑っ

ちゃうけど、それでも嬉しかったんだよね」

「だろ？ でも、今年はそんなに一々説明しなくても、絶対喜んでくれるプレゼント用意したからさ」

雅彦が廊下へ繋がる扉を開けると、長身の外国人女性が立っていた。

透き通る白い肌に潤んだ深紅のルージュのコントラストが、大人の色気を漂わせている。

真っすぐ前を見る知性的なその瞳は、意志の強さを感じさせるが、かといって必要以上に堅苦しくは感じさせない、微妙なバランスを保っていた。

つややかなブラウンの髪の毛を後ろで丸めて結い上げており、露になったうなじには艶っぽさを感じさせる。

シックなビジネススーツに隠されたボディは、相当に男好きのするボリュームがあるのだろう。

しかし、全体とすれば、どこか無表情な冷たさを感じさせる……そんな女性だった。

雅彦が来客を待たせていると知って、綾乃は赤ちゃんを抱えたまま慌てて立ち上がった。

そして雅彦の耳元に小声で話しかける。

「プレゼントって……一体誰よ。お客さん連れて来るなんて……」

「慌てるなって。これはうちの会社で今開発中の、ベビーシッター・アンドロイドだ」

「ベビーシッター・アンドロイド？」

雅彦の職場は、『サイバーメタルフィギュア株式会社』といって、世界的にも少々名の知れたロボット製造会社だ。

元々は某自動車系大企業の子会社として、産業用ロボットを主に手がけていたが、今では二足歩行の人形ロボット市場で世界シェアの首位を争う程の大企業に成長していた。

「労働力人口の減少に伴って、これまで人が担って来ていた労働市場も、徐々にロボットに取って代わる傾向にあるだろう？ 実際に医療や介護の現場にはもうかなりロボットが導入されている。介護士とか、看護師とかだな。しかし、医療や介護の現場だけでは市場に限りがある……そこで、個々の家庭にまでロボットを普及させる方法は無いかと考えだされた一つの方法が、ベビーシッター・アンドロイドって訳」

「ふうん。でも、そのベビーシッター・アンドロイドが、なぜ家に来てるの？」

「実はさ、俺が開発に携わっているプログラムと、後このアンドロイドの遠隔監視システムのテストを兼ねてるんだ。家で愛しの奥様が慣れない子育てに苦労していて、なかなか俺を構ってくれないって駄々捏ねて、きっちりテストやるからって上司に頼んで借りて来た。データを取るのは一年間だけど、気に入ったらそのまま使っていいってさ」

「ふうん。なんだか良く分からないけど、本当にベビーシッターなんて出来るの？」

「疑うんなら、ちょっと任せてみればいいさ」

「嫌よ。ロボットなんか任せて、もし頭から落とされたらどうするの？」

「大丈夫さ、そんなへましないって。なぜなら、こいつは元々セクサロイドだからな」

「何？ その、せくさろいどって」

「ぶっちゃけて言っちゃえば、セックスで男の相手をするアンドロイドさ」

「えー、嫌だ！ 信じられない。何でよりによってセックスの相手をするロボットに、赤ちゃんの世話を任せなくちゃならないの」

「これだから素人は……」

雅彦は『どうせ素人ですよー』と膨れる綾乃を尻目に話を続ける。

「要はさ、男を傷つけない様に、なおかついい気分させて逝かせる様に、セクサロイドには人の微妙な力感覚を認識、制御する為の複雑な機構が組み込まれた、いわばアンドロイドの最先端技術の結晶って訳。ほら、昔だって、VTRのビデオデッキが普及したのは、アダルトビデオの出現の影響が大きかった訳だし、インターネットの普及の影にはアダルトサイトや出会い系サイトの氾濫があった。セクサロイドだってそれと同じだよ」

「違うよー」

確かに、男性の雅彦と女性の綾乃の間には、セクサロイドの認識に対する温度差があっても致し方ないだろう。

ましてや、プロのエンジニアと只の素人と言う立場の違いが、お互いの認識の差を余計に際立たせていた。

「まあ、そういわずに、ちょっと手を触ってみな。クローディア、おいで」

雅彦は振り向いてアンドロイドを呼ぶと、アンドロイドは『はい』と滑らかに答えて雅彦の傍らに立つ。

綾乃は赤ちゃんを一旦雅彦の腕に委ね、恐る恐る右手を握ってみる。

触り心地といい、仄かな温かさといい、予めアンドロイドだと聞いていなければ人間と間違えても仕方が無い位、触感は人肌そのものと言ってよかった。

「まるで人間そのものだろう？ 表面を特殊加工したシリコン樹脂で覆っているからね。それに、重量だって人間と殆ど変わらない。そうしないと騎上位みたいな体位は取れないからな」

綾乃はアンドロイドの掌を鼻に近づけて、犬の様にクンクンと臭いを嗅いでいる。

「幾らそんなに匂いを嗅いだって、ちゃんとクリーニング済みなんだから、石鹸の臭いもイカ臭い匂いもしないさ」

「ふうん。でも、これがアンドロイドなんて、信じられないね。私なんて、雅彦ってば、何堂々と女なんか連れ込んでるの……って、一瞬ムッと来ちゃったからね」

「綾乃、いいかい」

雅彦は再び赤ちゃんを綾乃に託し、通勤時には常に持ち歩いている鞆から、普段会社で愛用しているモバイルパソコンを取り出した。

そしてなにがしかのソフトを立ち上げていじっている。

「今さ、会社のサーバーに繋げてるんだけど、綾乃と、赤ちゃんの事も記憶させておくから。綾乃、ちょっとアンドロイドの正面に立って見て」

綾乃が赤ちゃんを抱えたままアンドロイドの正面に立つと、雅彦がモバイルパソコンのディスプレイを綾乃の方に向けて見せてくれる。

「わかる。ここの画面が、今このアンドロイドのカメラが捉えている画像、ちゃんと綾乃が

映っているだろう？」

「うん。確かに」

「こら、手なんか振るなって。ちょっと待って、まず映像で認識させてと、それから、赤ちゃんの顔も映してくれる？」

「こう？」

綾乃が赤ちゃんを少し持ち上げて、なるべくアンドロイドの正面に赤ちゃんの顔が来る位置にする。

しかし、綾乃よりはアンドロイドの方が背が高い為、また綾乃の細腕だけで赤ちゃんを抱え上げ続けるのも少々酷だった為、早くも綾乃が音を上げ始める。

「まだあー」

「OK. もういいよ。それから、声もサンプリングしとこうか。これで、綾乃の事もご主人様だって認識出来る様になるから」

それから、雅彦はアンドロイドに綾乃の声を登録していた。

ところで赤ちゃんはと言えば、先程までのむずがり加減が嘘の様に、綾乃の腕の中で気持ちよさそうに寝息を立てていた。

綾乃は赤ちゃんを一旦別室にあるベッドに寝かせて、それからもう一度居間に戻って来る。

「ねえ、雅彦。夕食はどうする？ 今日あの子昼間っからずっと機嫌が悪かったから、なんにも手を付けていないんだけど」

「今日は綾乃の誕生日だしさ、出前でも取ればいいよ。それよりも、俺からのプレゼント、気に入ってくれた？」

\*

結局夕食は宅配ピザを頼み、雅彦は仕事帰りに買ってきた赤ワインを飲みながらピザをつまんでいた。

綾乃は赤ちゃんの様子が気になっていたもので、付き合い程度に軽く飲む位だった。

「ねえ、でも、本当にあのロボットに赤ちゃんの面倒を見させるつもりなの？」

「当然だろう。それにさ、そのロボットっていうの、やめてくれないか？ それこそ伝説の鉄腕アトムの世界になっちゃうじゃないか」

「だって、ロボットはロボットでしょう？」

綾乃がダイニングテーブルに腰掛けたまま、脇のソファに腰掛けているアンドロイドを横目で見ると

「違うよ。ロボットは鉄の塊だけど、アンドロイドは人間そっくりで作られているからね。それに、さっきの繰り返しになるけど、セクサロイドは元々人間の相手をする様に出来てるんだから、赤ちゃんだって余程うまく扱えるさ」

「ふん。どうせ私は不慣れな新米ママですからね」

「ごめん、そういう意味じゃないんだ。うーん、分かってくれないかな。つまり、人間とアンドロイドの違いより、アンドロイドとロボットの違いの方が大きいって、言いたいただけなんだけど」

「よくわかんない」

「それにさ。万全の上にも万全の対策を施してある。このアンドロイドは自律走行型だけど、会社の集中管制センターで、アンドロイドの状態が常にモニターされるようになってる。もし異常を発見したら、集中管制センターから動作を強制的に停止する事も出来るし、心配ならマスターキーを持っている事も出来る」

「マスターキーって？」

「集中管制センターがアンドロイドの動作を強制停止出来るのと同じ様に、マスターキーを使ってアンドロイドの動作を止める事も出来る。だから、どうしても心配なら、しばらくの間綾乃にマスターキーを預けるから、このアンドロイドがどの程度完璧にベビーシッターをこなせるか、その目で確認してみるといい」

「そうはいつでもねえ」

「それにさ、さっきアンドロイドのカメラの映像、見ただろう。あれは集中管制センターでもモニター出来るんだけど、個人情報保護の観点から、普段はモニターしてないんだ。ただし、予め申請を出しておけば、あのカメラ画像がいつでも Web 上で確認出来るサービスも提供するつもりなんだ。そうすれば、仕事中でもパソコンで常に子供の状況を映像で確認する事も出来るしね」

「ふうん。それって、ちょっと便利そうだね」

「俺さ、綾乃がせっかく掴んだファッション雑誌の編集の仕事、応援したいんだ。出産は仕方ないとしても、子育てには時間が掛かるし、でも余りブランクが長すぎると、仕事に戻っても勘が戻り難いだろう？ しかもファッションなんて流行り廃りがあるって間だから常にリサーチしていないとすぐに乗り遅れる。何年も仕事から離れる様になったら、それこそ復帰を諦めなくちゃならなくなるかも知れない。俺が家事や育児をある程度受け持ってやりたいのは山々なんだけど、この仕事以外にももう一つプロジェクト抱えてて忙しいし。だからさ、アンドロイドにベビーシッターをある程度請け負ってもらえれば、仕事と育児の両立も可能じゃないかな？」

「そっか、そんな事考えててくれてたんだ。ありがとう。でもさ、仕事もやりたいけど、今は雅彦と私の子供が無事に育ってくれる事の方が大切な。でも、ありがとう。とっても、嬉しいよ」

「へへ、やっとわかってもらえた？」

「うん、早くそれを言えばいいのに」

「俺、口下手だから」

「それに、会社にはもう家でデータ取るって言っちゃったんでしょ？ だったら、とても全部は任せられないけど、様子見ながら少しずつはやらせてみるよ」

言いつつ綾乃が立ち上がる。

奥の部屋から赤ちゃんの鳴き声が聞こえていた。

綾乃が奥の部屋へ向かおうとするのを、雅彦が手首を捕まえて引きとめ、ソファに腰掛けていたアンドロイドに告げる。

「クローディア、奥の寝室で寝ている赤ちゃんの様子を見てきてくれるかい？」

「はい、雅彦さん」

アンドロイドが奥の部屋へ向かっていくのを、少し間をおいてから雅彦と綾乃の二人が後をつける。

二人が部屋の戸口に立って見つめる視線の先で、アンドロイドのクローディアは、それが何年間も毎日繰り返して来た、勝手知ったるルーチンワークといった風に、手際よく、しかし赤ちゃんのデリケートで壊れやすい体を完璧に知り尽くした慎重さと、母ならではの子に注ぐ情愛をも漂わせつつ、赤ちゃんのオムツ替えを難無くこなしていた。

一足早く雅彦は居間のソファに戻って、飲み残しのワインをグラスから空け、更にもう一杯新たにワインを注いでいた。

「ふうん。手馴れてるんだ」

綾乃が感心しつつも、万が一のミスも見過ごさない厳しい視線で見届ける中、クローディアの作業は呆気なく終わった。

「綾乃さん、終わりました。これはどうしますか」

「これは私が……。さあ、ソファに座っていらして」

綾乃はクローディアから小さく丸められた紙おむつの残骸を受け取ると、汚物入れに捨てに行った帰りに、もう一度ベビーベッドを覗き込む。

赤ちゃんは何事も無かった様に心地よく眠り込んでいる。

「ねえ、綾乃。そうしたら、そろそろアンドロイドをドライブモードにセットしていい？」

雅彦は再び使い慣れたモバイルパソコンを手に、画面に表示される様々な数字やグラフ類と格闘していた。

クローディアは同じくソファの片隅に無表情のまま慎ましく腰掛けている。

「ドライブモードって、何？」

赤ちゃんの具合を確認して、一応納得した綾乃が居間に戻ってくる。

「このアンドロイドはさ、今はトレーニングモードで動いてる。こうやって目的地まで運んだり、メンテナンスしたり、その他本来の職務以外の時はトレーニングモードにする事になっているんだ。幾らセクサロイドが人間そっくりっていても、トレーニングモードの時は、一々人間が命令を与えないと動かないし、表情も無表情で、いかにもアンドロイドって感じだろう？ でも、ドライブモードに切り替えると、元々与えられていた命令をこなす為に、すべてを自分自身で判断する様になる。このアンドロイドの場合は育児だ。それこそ生まれたばかりの乳児から……そうだな、小学校入学前の幼児程度までなら、現時点での守備範囲だ。子供は年齢によって細かく扱い方を変えないといけないから、とりあえず乳幼児分のソフトをインストールしてきたんだ。もちろんソフトを追加すれば、成人するまでこの一台が全て面倒を見てくれる」

「ふうん」

「それに、このアンドロイドの売りは、母親に必須の特性である"母性"を忠実に再現する"母性エミュレータ"が内蔵されている事にある。『母は何とかより強し』って諺もあるだろう？

それと同じで、一度設定したターゲットとなる子供の健全な成長を第一に考えて、アンドロイドは動く。人の親は不安定だから、馬鹿みたいに子供を溺愛したり、逆に虐待や折檻を繰り返す親もいるけど、このアンドロイドにそんな事は絶対にない。もし必要ならば、ターゲットの子供の盾になる為に、我が身を犠牲にするよ。最大限の情愛をもって育てるし、必要ならば躰のために叱ったりもする。まさに最高の母親の理想像を作り上げるのが、このベビーシッター・アンドロイド・プロジェクトの最終目標さ」

「ふうん。なんか凄いのかなって気はするけど、セクサロイドっていうのがね」

「何いってるんだよ。綾乃はセクサロイドって馬鹿にするけどさ、さっきの母性もそうだけど、感情エミュレーション技術の進歩はセクサロイドのおかげなんだ。ただ男を逝かせるって言ったって、体を動かしてりゃ良いて単純なものではないし、男により気持ちよく逝ってもらう為には、雰囲気作りで気分を盛り上げる必要がある。男といっても十人十色だから、どんな男でもそれなりに満足させるのは、並大抵の苦勞ではないんだ。その点セクサロイドは、相手の感情や関心、趣味趣向の情報をさり気なく吸収しつつ、相手の男にとって最高の女を演じようとプログラムされている。その技術はそのまま一般的な人間関係の構築の場面でも使えるし、多感な幼少期の子供に適切な教育を施すのに、是非とも必要な条件だよ。それに、このアンドロイドは綾乃にとっても良き友達になる。子供の育成に重要な影響をもたらすのは、やはり何といっても母親だから、子供の育児は、同時に母親と子供とベビーシッターの関係をどの様に円滑に運ぶかという事でもあるんだ。だから、アンドロイドは綾乃の趣味趣向や考え、悩み事なんかも逐一リサーチして、その問題が解決に向かうようにサポートしてくれる。もちろん、何よりも育児優先だから、育児に悪影響が及ばない範囲でだ。ちょっと、アンドロイドの後ろに来て見て」

雅彦に促されて、綾乃はソファの後ろを回って、アンドロイドの後ろに立つ。

「首の、うなじの辺りを見てみな」

長めの髪の毛が結い上げられて露になったアンドロイドの首筋には、直径五ミリくらいの穴が四つ、四角状に空いていた。

「ここから内臓バッテリーへの充電と、インターネット接続を通した情報収集を同時に行なうんだ。ただし、集中管制センターのモニタリングはWi-Fi経由で常時行なっている。まあ、用途の違いとセキュリティの問題で情報伝達ルートに分けてるんだけど……」

「見た目は本当に人間そっくりなのに、こういう部分を見るとやっぱりアンドロイドだよね」

「そうさ。でも、ドライブモードにセットする事で、このアンドロイドに命を吹き込む事が出来るんだ。少なくとも、周りの人間にはそう錯覚させてくれる。で、そろそろドライブモードにセットしていい？ そうしないと、集中管制センターのモニタリングが始まらないんだ」

「そうしないと、会社で約束したデータも取れないでしょ？ いいよ」

「OK. そうしたら、ドライブモードに切り替えたら、自動的に再起動するから。それから五分もすれば、気心の知れた親友の誕生さ」

「雅彦。もうピザ食べないでしょ？ 片付けちゃうよ」

いつの間にか、綾乃がダイニングテーブルに放置されている、冷えた食べ残しのピザを片付けに入っている。

「良いよ」

雅彦は生返事で答え、モバイルパソコンの電源を落としつつ、使い慣れた通勤鞆に納めた。そのままダイニングの綾乃に声をかける。

「今のうちに、アンドロイドの充電ユニットを持ってくるよ。まだ車に積みっ放しなんだ」

\*

雅彦が、背もたれの長く伸びた椅子の様な物を抱えて戻ってきた。

それがアンドロイドの充電ユニットらしい。

アンドロイドは充電時に腰掛けて、ちょうど首の辺りまで伸びた背もたれに背筋をあわせると、背もたれの先のU字の部分が首にフィットする様になっている。

その、U字の部分の中心に充電、及びネット接続用のソケットがついているのだ。

雅彦は、充電ユニットをベビーベッドのある寝室の片隅に固定し、ユニットから延びるケーブルを、壁の汎用ソケットに指し込む。

今時の家電品は、ネット対応機能を標準装備しているものが大半だったから、電源コードとネット接続ケーブルを束ねて、コードの接続一本で電源とネット接続が同時に行なえるものが普及していた。

その為、比較的新しい住宅では電源コンセントにネット接続ラインも一体化されたタイプが一般的となっていた。

雅彦は充電ユニットの電源を入れ、パイロットランプが正常起動の緑色を示すと、ベビーベッドで気持ちよく寝息を漏らしている我が子を覗き込む。

「きっと、お前が始めてベビーシッター・アンドロイドで育つ子になるな」

静かに寝室を出て居間に戻ると、ソファで綾乃とクローディアが女同士の雑談に興じている最中だった。

「クローディア、今日はもう疲れただろう？ 寝室に寝床を用意しておいたから、そろそろ休んだ方がいい。それから、赤ちゃんの事を頼むよ」

「そうね。では、雅彦さん、綾乃さん、おやすみなさい」

雅彦に答えて、クローディアは綾乃との会話を早々に切り上げ、寝室へと下がった。

「ねえ、あの人、いきなり話し掛けてきて、クローディアって自己紹介してたけど。何かとてもフレンドリーね」

綾乃も余りの急激な変わり様に少々驚いたのか、少々興奮気味だ。

「だから言っただろう？ 気心の知れた親友の誕生だって」

「でも、まさか、アンドロイドがあんなに人間そっくりなんて……」

「確かに最初はびっくりするかもな。でも、そのうちアンドロイドなんて事は気にならなくなる。まあ見てなって」

「とりあえずお友達って言うのはいいんだけど、やっぱり何か複雑……」

「まだなんか気になる？」

「だってさあ、幾らベビーシッター・アンドロイドって言ったって、元はセクサロイドな訳でしょ。男のセックスの相手をするロボットが、子供の世話をするなんて、何か……」

「だから、それは今までも言ったけど……」

「技術的な事とかは分かるよ。っていうか、分からないけど、セクサロイドに使われた技術が他にも役に立つからって理屈はわかるよ。でも、生理的な部分で受け付けられないんだよね」

「綾乃さ、何か勘違いしていない？ 別にセクサロイドをベビーシッター・アンドロイドとして使う訳じゃなくて、クローディアの場合は、新開発の母性エミュレータの実証テストに代用しているだけで、実際の商品はセクサロイドをそのまま使う訳じゃないよ。ベースはセクサロイドだけど、不要な機能は外すし、新たに必要な機能は追加する。たださ、まだテストの段階で、別途開発中のボディもまだ完成していないし、セクサロイドならそのまま代用出来るから使ってるだけさ」

「でも、元々男とセックスするロボットなんだから、もしかしたら雅彦を誘惑してエッチな事とかするかも知れないし……」

「絶対にありえないよ。ベビーシッターに不要なアプリはみんな消去してきたんだから、子供の健全育成に関係のない行動を取る筈が無い」

「でもさ、セクサロイドっていうくらいだから、その……女の人のアソコとかも……リアルに出来てる訳でしょ？」

「まあね。でも、機能させるアプリは消去したんだから、くっ付いてるだけ。まあそれ位は元がセクサロイドなんだから、仕方ないさ」

「でも……」

「要は、妬いてるんだ」

「そういう訳じゃないけど……」

「さっきも言ったけど、俺は会社の同僚に馬鹿にされたり、冷やかされたりするくらい、綾乃の事が好きなんだ。信じられない？」

雅彦が綾乃の肩に手を回して抱き寄せる。

「分かってるよ。それは」

綾乃も応えて、雅彦の背中に手を回してきた。

何しろ、妊娠が発覚してからこの方セックスはご無沙汰だったし、元々比較的ボディランゲージの活発な方だった二人も、綾乃のお腹が目立ち始めてからは自粛していた事もあった。

更に、赤ちゃんが生まれてからは、綾乃が慣れない育児に追われる一方で、まともに雅彦

と向かい合う時間も取れなかったのだ。

「クローディアにはさ、優れものの機能があって、充電中にもエコモードで常に赤ちゃんの事を監視してくれてるんだ。もし赤ちゃんの異変を察知したら、自分でエコモードを解除して対応してくれるから、任せておけば万事OKって訳」

「クローディアの事は、もう良いじゃない……」

綾乃が雅彦の胸に顔を埋めている。

「そうだな。そうしたらさ、久しぶりにお互いの愛を確かめ合う為に、エッチな事しようか？」

雅彦の左腕が、いつの間にか綾乃の腰の辺りを漂っている。

「ダメだって。クローディアの事を信用した訳じゃないんだから、もう少ししたら赤ちゃんの様子を見に行かないと……」

「クローディアの事はもう良いって言ったのは、綾乃だろう？」

雅彦の腕の中から見上げる綾乃の言葉を遮ると、綾乃の潤んだ唇に唇を重ねた。

——バカ、ダメだったら……。

しばし唇を重ねた後、綾乃は吐息混じりに声を漏らしたが、雅彦の耳には届かなかった。

しかし、綾乃もその言葉とは裏腹に、体の芯からとろける様に全身の力が抜けてゆくのを感じていた。

\*

クローディアは、実際の所ベビーシッターとしての役割を完璧にこなしていた。

当初はクローディアに疑いの目を向けていた綾乃も、クローディアの子育てに関する全ての作業が熟練の域に達しており、反面自分は子育てに余り向いていないのだと自覚させられる場面に度々見舞われた。

その度に少しずつクローディアは子育ての実権を握っていき、その分だけ綾乃は子育てから開放されていった。

しかし、クローディアと自分との格差に、子育ての適性の無さを見せ付けられ、劣等感に苛まれる綾乃に対しても、クローディアは日常のこまごまとした会話を交えたカウンセリングを通じて、確実に綾乃との信頼関係を築いていった。

クローディアを雅彦が連れてきてから二ヶ月がたった頃、綾乃は育児を全面的にクローディアに任せて、自分は出産前のファッション雑誌の編集の仕事に復帰する事を決めた。

クローディアに対する当初の不安は吹き飛んでいた。

雅彦は綾乃の職場復帰を歓迎したが、同時に注意事項も告げた。

「クローディアは一年に一度、オーバーホールの為に一週間程家を離れないとならないから、ちょうど綾乃の誕生日前後は一週間休んで、クローディアの代わりに育児をやってくれないか？」

いわば、年に一度人間ドックに入っているのと同じ様なものだ。

それから二週間後に綾乃は仕事に復帰し、職場の同僚を驚かせたものだった。

綾乃は企業秘密のオフレコとして、自分の夫の会社が人間そっくりのベビーシッター・アンドロイドを開発中で、現在動作テストの為にベビーシッター・アンドロイドに育児を任せている事などを話した。

同僚は『ロボットなんかには育児を任せて心配じゃないの?』と尤もな質問を浴びせるが、それは実際にクローディアの完璧な仕事振りに触れない限り実感できないだろう……と感じながらも、雅彦の説明を思い出しつつ質問攻めの回答に追われた。

また、職場で常に子供の状態を確認出来るという、アンドロイドのカメラ映像を Web 上で見られる機能も好評だった。

その映像を見ているおかげで、仕事中でも子供に対する不安や心配が払拭できたからだ。

もちろん、クローディアが元々セクサロイドだったと言う事は伏せてある。

そんな事を表沙汰にすれば、ますます話がややこしくなるからだ。

その時のクローディアの話が、二年後のベビーシッター・アンドロイドの発表、レンタル開始に合わせた特集記事として取り上げられるきっかけになるとは、当時の綾乃にも予想できなかった。

クローディアによる、母性エミュレータ他幾つかのアプリケーションソフトの動作テストは順調に行なわれ、大きなバグも無く一年後に無事終了した。

しかし、雅彦と綾乃はクローディアの継続使用を希望した為、当初の約束通りクローディアの延長使用が認められた。

プロジェクトは、その後試作機数機によるモニタリングテストが更に一年間行なわれ、トラブルが無い事を確認した上で晴れて市場に打って出る事になった。

製品の値段とメンテナンスの手間、集中管制センターによる二十四時間監視体制などを含めた、トータルのランニングコストは決して安くはなかった為、全てのサービスを一括してレンタルでの取り扱いとした。

毎月のレンタル費用も決して安くは無かったが、共働きでそれなりの収入がある若い夫婦には注目を浴びた。

そこで夫婦のうち片方の収入がなくなる事を考えれば、共働きを続けたままベビーシッター・アンドロイドをレンタルした方が、収入面で余裕が見込めるだけでなく、子育てに対する不安の解消が狙えると言う意味合いもあった。

更に、その時期にあわせて、雅彦と綾乃夫妻の、二年前からのベビーシッター・アンドロイド体験記と題した記事が、綾乃の編集する雑誌に掲載されたりしたから、一部でちょっとしたブームとなった。

もちろん、アンドロイドによる育児に対する懸念の声もあがったが、ベビーシッター・アンドロイドの特質すべきコミュニケーション能力が、返って子供の健全な成長に寄与すると言う声もあったし、育児能力の欠如した親による子供の虐待事件も時折発生していたから、むしろそういった事例への対策として、ベビーシッター・アンドロイドを活用しようという動きも現れた。

大勢としては、今すぐにアンドロイドを育児利用による影響度が見えない以上、現状を注視するしかないとの建前の元、事実上ベビーシッター・アンドロイドの普及は黙認されていた。

クローディアの本当に素晴らしい能力は、子供の成長と共に雅彦と、特に綾乃を震撼させる程、遺憾なく発揮された。

一般的には、普段子供の育児を行なうベビーシッター・アンドロイドに子供が愛着を感じてしまい、逆に仕事を持つ親との関係が疎遠になる可能性が考えられたが、クローディアは両親と自分自身に対して同等の親近感を子供が抱くように、見事にコントロールしていた。

もちろん、時折クローディアから子供とコミュニケーションを取る様アドバイスがあったが、その忠告に従ってさえいれば、後は万事クローディアがうまく運んでくれた。

雅彦は、自らがソフトの開発に携わっていながらも、実際にクローディアと接する中で、開発したソフトの威力を改めて再認識させられた。

雅彦も、綾乃も、それぞれの職場で自らの持つ能力を遺憾なく発揮し、それぞれの職場で責任ある地位と報酬が与えられた。

二人の人生は今最も輝きに満ちており、その先に控える明るい未来への道程も明確に見極める事が出来た。

そんな二人とクローディアの間に微妙な意識の変化をもたらしたのは、彼らの愛しの一人息子が小学校入学を翌年に控えたある日の事だった。

\*

「クローディア、ちょっと来てくれる？」

綾乃に声をかけられ、就寝中の息子をエコモードで監視中だったクローディアが、綾乃の後について居間に向かう。

居間のソファには雅彦もいた。

「クローディア、今あの子の将来の事を綾乃と話していたんだけど、綾乃はこの学校に入りたいって言うんだ。クローディアはどう思う？」

雅彦から受け取った e-Paper（電子ペーパーの事）には、とある有名私立学校の学校案内が記憶されていた。

クローディアは、学校案内の内容を一字一句漏らさず記憶してゆく。

後ほどネット経由で情報収集する為だ。

「私はね、あの子に受験の心配なんかさせないで、もっと伸び伸びと色々な事にチャレンジさせてあげたいの。だから、そこなら小学校から大学までの一貫教育も選択出来るし、将来を考えるとその学校が良いって思うんだけど」

この頃、子供の少子化が進み、学校の質に拘らなければ誰しものが大学にまで入学できる時代となっていた。

しかし、だからこそ我が子をより環境の良い学校に入学させようと、一部の有名校目当ての受験競争はより熾烈になっていたのだった。

「ごめんなさい。この学校については何も分からないから、今は何もいえないの。明日になれば判断出来ると思うのだけど……。でも、雅彦さんと綾乃さんがそれを望むのなら、私も協力したい」

「そうか、そうだったな。それなら、明日もう一度聞くよ」

「わかりました。雅彦さん」

「あなたにも賛成してもらえると嬉しいんだけど……」

「綾乃さんの意見に賛成できるかどうか、これから調べて見ますから」

「ええ、お願いね」

「では、おやすみなさい」

クローディアが軽く会釈して、自分の寢床……充電ユニットに戻る。

まだ不完全だったバッテリーの充電と、綾乃が子供を入学させたいと考えている学校の情報を、ネット経由で収集する為だ。

クローディアが子供部屋（現在は子供部屋に充電ユニットがある）に戻るのを確認して、綾乃が雅彦に寄り添ってきた。

「ねえ、クローディアは賛成してくれると思う？」

「どうかな。でも、クローディアが反対しても、その学校に通わせたいんだろう？」

「それはそうだけど……でも、これまでの育児に対するクローディアの貢献を考えれば、無視する訳にはいかないでしょ」

「技術者の立場として言わせてもらおうと、今のクローディアには乳幼児相手の育児が精々だ。もうそろそろ守備範囲を越えるって事。だから、その守備範囲を越える課題に対して、クローディアがどの様な答えを出すのか、興味はある。実はさ、もう製品版のベビーシッター・アンドロイドも実績を上げてるし、元々クローディアはテスト用に代用してただけだから、そろそろ返却して欲しいって話が会社から来てるんだ。このままベビーシッター・アンドロイドを使うなら、製品版を正規の手続きでレンタルしてくれて。もちろん社員特価で。その話を綾乃にしなないって思っていた矢先に、この学校話が出てきて、そろそろクローディアもお役ごめんって事なんだろう」

「そうなんだ。でも、クローディアがいなくなるのは、ちょっと心細くなりそう」

「子供を全寮制の学校に入れたいって言っているのに、ベビーシッターは必要ないだろう？」

「それはそうだけど……クローディアは私たちの良きアドバイザーでもあったでしょ？ ただのベビーシッターって言うだけじゃない」

「実はさ、父親の立場から言わせると、本当はその学校には余り賛成出来ないんだ」

「雅彦……」

「全寮制という事は、無理やり子供を親から引き離すって事だろう？ 既に成人しているならわかるし、子供が自分から一人立ちしたいなら、敢えて止める理由も無い。ただ、今のあ

の子はこれから小学校に上がろうって年だ。まだまだ親の保護がいる。それを親の都合で、たった一人で放り出すっていうのが引かかるんだ」

「私はそんなつもりじゃ……」

「わかってるさ。学校の教育方針も聞いたし、全寮制にしている理由も聞いた。別に綾乃を責めてる訳ではないんだ。だから、いいよって了解しただろう？ 俺が子供の教育に求めるのは、ちゃんと自分一人で生きていくだけの知識と、能力を身に付けて、真っ当な人生を歩んで欲しいってだけだから、余り『ほにゃらら学校に入れたい』というこだわりは無い。子供にとって極度の負担になるなら、別に有名私立校に入れなくてもいいと思ってる。だから、将来子供が受験に縛られない様になって綾乃の考えには、むしろ賛成なんだ」

「でも、全寮制が気に入らないんでしょ？」

「気に入らないとかじゃなくてさ、小さい頃から独立心を養うって事はそれでいいんだ。でも、反面親子関係は希薄になる。あの子はどんどん俺達から離れていく。綾乃は母親としてそれを受け入れられるのか？ しかも、他の子よりも遥かに早い小学生から始まるんだ。途中でやっぱり止めるなんて訳にはいかないんだから」

「それは……」

それっきり綾乃は押し黙ってしまった。

「もしかしたら、俺の取り越し苦労かも知れないけど、綾乃はいずれそういう部分で辛い思いをする様な気がしてさ。そんな綾乃は見えていられないし、俺は今でも会社の連中に呆れられたり、冷やかされたりする程綾乃一筋なんだから、心配なんだ」

「雅彦……」

綾乃が雅彦にしがみついてくる。

「いずれにしても、子供は自立して親元を離れていく。これは自然の流れだし、妨げちゃいけないんだ。そうして子供がいなくなっても、俺には綾乃がいてくれる。俺はそうやって割り切ってる。俺の事、子供に薄情だと思う？」

「ううん。雅彦の言う通りだと思う。私、自分だけで突っ走っちゃって、甘かったのかなあ？」

「子供思いの素敵なお母さんだと思う。だから、基本的には綾乃の判断に全て任せておけるんだ。俺さ、クローディアに感謝してるんだ。クローディアがいなくて、今頃子育てに追われていたら、絶対に俺はパパかお父さんって呼ばれて、綾乃はママかお母さんって呼ばれる様になってたと思う。会社の同僚がみんなそうだし。でも、クローディアが育児を受け持ってくれた事で、お互いに恋人同士の頃の気持ちが続いているのかなって思う。だから、まだお互いに名前と呼んでるだろう？」

「そういえばそうだね。雅彦が"お父さん"なんて、笑っちゃうね。未だに毎年、なんでこんなプレゼントになるのって、つい笑っちゃう誕生日プレゼントくれるし。でも何故か子供には普通のプレゼントなのに」

「それいうなって。これでもひと月くらい真剣に悩んでるんだから……」

「いいよ別に。毎年『なんでそんなプレゼントになったのか』、その理由を聞くのが楽しみ

なんだから。逆に、今更普通のプレゼントなんかもらっても、どうしたんだろうって疑っちゃうかも。そう考えると、プレゼントってやっぱり気持ちなんだなって思う。そういう変わったプレゼントでドキドキさせて、笑わせてくれる所が雅彦らしさなんだね」

「それって、なんかバカにされてる？」

「違うってば。普段は優秀なエンジニアの癖に、そういう部分は子供っぽくてお茶目だから、いつまでも雅彦は"お父さん"じゃなくて雅彦のままなんだなって」

「やっぱりバカにしてる」

「違うってば。そういう所が好きだって言ってるのに」

珍しく綾乃から唇を求めてくる。

雅彦の上に綾乃が重なって唇を合わせ、熱く濃密な吐息と共にひとしきり舌を絡めあつた。

そのままソファの上に二人は重なったまま、しばしお互いの鼓動を感じ合っていた。

「いっそのこと、もう一人子供作ろうか？ 今度は女の子」

突然の雅彦の意外な言葉に、綾乃は呆気にとられる。

「いきなり何言ってるの？ 別に今作らなくて……」

「嫌か？」

「嫌とかじゃないけど、そんな急に言われても。仕事の都合だってあるし……」

「そうだな。綾乃も高齢出産って言われるまでにはまだ時間もあるし、今でなくてもチャンスはあるか」

「もう一人欲しいの？」

「やっぱり、女の子も欲しいな。綾乃は乗り気じゃないんだ」

「そんな事無いけど、いずれにしてもクローディアはいなくなるんだし、なんか不安」

「別にベビーシッター・アンドロイドをレンタルすればいいんだから、今までと変わらないさ。しかも今度は製品版だから、成人するまできっちり面倒見てくれるよ。まあ、中学生か高校生になったら余り必要ではなくなるかも知れないけど」

「それはそうだけど、これまでクローディアと培ってきた信頼関係は何物にも代えられない。クローディアだったから、いままで安心して育児を任せて来れたんだから」

「まあ、いいさ。いずれにしても、子作りは当面延期しよう。ただし、今日はその予行演習って事でいいだろう？」

「えっ？ そんなにしょっちゅう予行演習しなくても良いでしょ？」

「そんな事無いさ。日頃から予行演習しておかないと、すぐにやり方を忘れちゃうからな」

\*

クローディアは、その学校が全寮制で、親子が離れ離れになるという部分に懸念を示したが、それ以外には取り立てて問題がなかったため、雅彦と綾乃の選択に協力の意向を示してくれた。

早速その日から育児プログラムの中に小学校受験対策が盛り込まれたが、元々その様な特別な教育を施さなくても、クローディアは日々の育児の中でそれなりの訓練を行っていたのだ。

だから、実は雅彦が内心半信半疑だった、息子の小学校の入学試験にも無事合格し、綾乃は我が事の様にならなって喜んだものだった。

そして年は明け、息子の入学式直前に、雅彦ら親子にクローディアも含めた四人で、ささやかなパーティーを催した。

息子の小学校入学祝と、親子がしばしの別れを惜しむ為、そして、雅彦ら親子とクローディアの永遠の別れを惜しむ為だった。

クローディアは一切飲食が出来なかったが、会話に参加して場を盛り上げるのに一役買った。

クローディアの卓越したコミュニケーション能力は、こういう時こそ遺憾なく発揮されるのだ。

次の日、息子の入学式を直前に控えて、クローディアを会社に返却する事になった。

トレーニングモードにセットして、無表情になったクローディアを見て、息子は少々怪訝な表情を見せたが、それでも綾乃と共に玄関まで出て、クローディアと、それに付き添う雅彦を見送った。

雅彦は、子供にはクローディアが定期点検に行くと言い含めていた。

定期点検で一週間程家を離れる事はこれまでも何度かあったし、クローディアがいない時は綾乃が必ず付き添っていたから、子供は普段余り一緒にいられないお母さんに甘えるのに忙しく、そのうちにクローディアも帰ってくるといった感じだったのだ。

だから、息子は今回もそれと同じ様なものだと感じたに違いない。

ただでさえ小学校に入学したり、親元を離れて慣れない寮生活を始めたりと、生活環境の激変する息子に対して、これまでの人生の大半を一緒に過ごして来たクローディアとの永遠の別れを言い出せなかった。

いずれ発覚する嘘ではあったが、時を置いてから告白した方が、息子の受ける精神的衝撃は和らぐだろうと考えたのだ。

クローディアは雅彦と共に会社に戻り、早速全身のクリーニングと簡単な機能テストを受けた。

本来ならば、このまま本体のメモリを全て消去し、そのまま一旦倉庫に保管される事になる。

そして、新たな用途に応じたプログラムやデータを改めて入れなおした上で、ユーザーに貸し出されるのが通常の流れだった。

しかし、雅彦はクローディアのメモリに保存されている情報に興味があった。

特に、ベビーシッター・アンドロイドとしては、現時点で最も長期間に渡る作動実績を上げていたから、そのクローディアのメモリに蓄積されたデータは、今後ベビーシッター・アンドロイドのソフト面における更なる機能向上と、長期に渡る安定的動作を保証する為に

不可欠の資料となる。

そこで、メンテナンス部門にクローディアの扱いを一旦保留とし、雅彦が直々にデータのバックアップを取ってから、通常の処理を施すという事で話をつけた。

翌日、雅彦と綾乃は、仕事を休んで息子の小学校入学式に出席した。

尤も、綾乃は息子の入寮準備があったり、クローディアを返却する事情もあった為に、この一週間程仕事を休んでいた。

無事入学式を終えると、そのまま校舎に併設されている寮棟で入寮手続きを行い、子供の荷物を運び込んだ。

息子はむずがる事も無く、実にあっさりとして雅彦や綾乃の帰宅を見送ったから、逆に彼らの方が、特に綾乃は後ろ髪を惹かれる思いのまま、小学校を後にした。

その翌日、雅彦が弁当箱大のリムーバブルメモリ・パッケージを持参してメンテナンスルームに入ると、既にクローディアが作業台に固定されて、雅彦がデータのバックアップを取るのを待ち受けていた。

「セッティングはしておいたから、いつでもバックアップを始めてくれ」

雅彦に声をかけたのはメンテナンス部の課長で、ベビーシッター・アンドロイドの開発に際しては度々世話になっていた。

「わかりました。ありがとうございます」

雅彦は早速作業台に直結された端末のコネクタに、持参のメモリを接続してバックアップを開始する。

この様な面倒な手段をとらなくても、作業台の端末と雅彦のデスク上の端末を社内サーバ経由で接続して、社内ネットワーク経由でバックアップを取る事も出来るのだが、クローディアのデータはいわば雅彦ら家族のプライベートな情報でもある。

それだけに、社内ネットワークを通す事には余り気が乗らなかったのだ。

「わざわざこんなモグラの穴にこもってバックアップとは、そいつには余程やばいデータでも入ってるのか？」

声をかけてきたのは、現在はメンテナンス部で働く同期入社同期の奴だ。

「別にやばいデータなんか入ってないさ。こいつが例の、家でテストしていた機体だから、今後の為にデータを吸い出してるのさ」

「ふーん。やばいってのは、お前にとってやばいんじゃないのって事。例えば、夫婦でよろしくやっているとところを目撃されたとかさ」

「クローディアがそんな事するか」

「クローディアって、この機体か。HA-553S 改 製造番号二三五二号。やっぱり五年も一緒にいると情が移るもんか？」

「まあな」

「そういえば、夫婦でよろしくっていえば、お前の奥さんって、雑誌の編集をやってるんだろ？」

「時々記事も書くけどな」

「家の奴が買ってるんだわ。で、この前たまたまお前の奥さんの顔写真が載ってたんだけど、相変わらず若くていい女だよな」

「他人の女房に対して、そんな言い方するなよ」

「いや、羨ましいって話。家の奴なんて、子供産んでからトドみたいになりやがって、ありゃ幾らなんでも反則ってもんだ」

「幾らお前の奥さんだからって、そんなに悪し様に言う事は無いだろう。まあ、他人の家庭の事は知らないけど」

「あの実態に遭遇したら、浮気する男の気持ちも分かるだろうな。お前の奥さんべったりも会社じゃ結構有名だけど、あの奥さんなら入れ込むのも分かるな。逆にその奥さんが家の奴みたいになった時には、衝撃もでかいだろうけど」

「別に見た目がどうこうって問題じゃあないだろう？ まあ、確かに家の女房は俺から見てもいい女だとは思うけどな」

「けっ、自分でいうなよ」

「お前だって言っただろ？」

「おい、こいつ、なんか変じゃないか」

同期の男は会話を突如中断し、端末のディスプレイに注意を促す。

トレーニングモードの筈のクローディアが、インターネットにアクセスしている事を示すフラグが立っているのだ。

トレーニングモードは、基本的には全ての機能がウェイト状態で、自律的な動作はしない筈なのだが……。

「インターネットにアクセスしているな。どうする？」

「とりあえず様子を見るか……アクセス先は分かるか？」

雅彦の指示に、同期の男が端末を叩く。

「うーん。どこだろう。URLはどこかの学校の様だが……なんかの映像だな。モニターしてみるか」

ディスプレイに新たなウィンドウが現れ、延々と何らかの通路を移した動画が再生されている。

「これは、防犯カメラかなんかの映像っぽいけど……」

「画面が切り替わったな」

次の映像も、別の場所ではあるが、やはり延々と屋内の通路の動画が再生されている。

「つまり、どこかの学校の防犯カメラって事か……」

「らしいな。また切り替わった」

それから画面は、まるで映像のログファイルを漁る様に、一秒位の間隔でめまぐるしく切り替わった。

それから数分の後、ある動画に切り替わった所で、再び再生が始まる。

あまり大きくはない個室の、天井についているカメラの様だ。

部屋の真ん中辺りに、人間らしき物体が時折動いている。

雅彦には部屋にいる人影に覚えがあった。

「これは、家の息子だ」

「間違いないのか？」

「ああ、誰が自分の子供を見間違えるものか」

その瞬間、インターネットの接続が切断された。

作業台に視線を向けると、トレーニングモードにセットした筈のクローディアが起き上がっていた。

一方、端末上ではクローディアは機能停止したと表示されている。

「どうなってるんだ一体？」

「まずいな。暴走してるんじゃないのか？」

「マスターキーだ」

雅彦の声に reacting、同期の男はすかさずクローディアのマスターキーに手をかけるが、クローディアは何事も無かったかのように立ち上がった。

「クソ！ ダメだ。機能停止しない」

端末の前で慌てる二人の男を嘲笑うかの様に、クローディアはメンテナンスルームを飛び出し、そのまま屋外へと走り出してしまった。

\*

警視庁特殊機動部隊、対テロ特務班の精鋭十五名が、都内の某私立小学校への出動を命じられた。

「しかし、なぜ俺達が小学校へ？」

「サイバーメタルフィギュア社のセクサロイドが暴走したまま、同社を脱走したそうさ。直前のネット交信記録から、その小学校へ向かう可能性が高いらしい。とにかく、俺達は上の指示に従うまでだ」

「でも、セクサロイドと小学校って、かみ合わないんだけど」

「事情は良くは分らんが、どうもそこに通う子供と、そのセクサロイドに接点がある様だ。同社の通報によれば、暴走したセクサロイドがその子を襲撃する可能性もあるらしい」

「なるほどね。それで俺達の出番って訳か」

「でもさ、セクサロイドって、どう見分ける訳？ 人間そっくりに出来てるんだらう？」

「幾ら人間そっくりでも、中身はアンドロイドだからな。最高時速六十キロくらいで走れるそうさ。町中を全裸の女が時速六十キロで走ってたら、誰でも見分けがつかだらう？」

「なるほどね」

そんな会話を交わしつつ、対テロ特務班十五名は、専用ヘリで直接小学校の校庭に降り立った。

既に別途サイバーメタルフィギュア社から連絡を受けていた小学校も、一旦全ての生徒を体育館に集合させ、その後警察の指示を受ける手筈を整えていた。

対テロ特務班の隊長はそのまま体育館に向かい、また体育館からは、ヘリの到着を察知した校長らしき男が出てきた。

「今、体育館を中心に部隊を展開しておりますから、あなた方はそのまま体育館に留まって下さい。相手は時速六十キロで走るアンドロイドですから、これから別の場所に避難する時間も無いでしょう。相手も体育館に取り付くでしょうが、我々が外から狙撃しますので、絶対に体育館から出ない様にして下さい」

「わかりました」

校長は一度大きく頷くと、再び小走りで体育館に戻っていった。

体育館の扉が閉まるのを確認すると、隊長も事前に打ち合わせた位置につく。

それから一分も経たないうちに、隊員の一人から無線連絡が入る。

「標的捕捉。体育館の屋根です」

隊長が視線を向けると、セクサロイドは屋根の上を這う様に、体勢を低くして周囲の様子を窺っている様だった。

「角度が悪い……」

しかし、しばらくすると、セクサロイドは屋根の端の方に向かって徐々に下りてきた。

「標的は、多分体育館二階の窓を割って中に侵入するつもりだろう。標的が二階の壁に取り付いた時に狙撃する」

無線で隊長の指示が飛び、隊員はその時に備えて標的を注視する。

一瞬間をおいて、セクサロイドは左腕で体育館の屋根の雨どいに掴まったまま、右手で体育館二階の窓ガラスに手刀を叩き込んだ。

割れたガラス窓の破片が体育館内に飛び散り、多くの悲鳴が上がる。

「狙撃！」

同時に隊長の声が無線で飛び、隊員達の銃が相次いで標的を捕捉した。

勢いでセクサロイドの首がもげて、体育館の中に落ちる。

体は、上半身が原形をとどめぬ程に醜く変形し、そのまま体育館の壁伝いに落下した。

隊員から、セクサロイドの機能停止の報告を受けた隊長は、その足で体育館へ急行する。

体育館の扉を開けると、壁伝いに子供達の引きつった顔があった。

その誰もが、ぽっかりと空間になっている体育館の中心に視線を注いでいる。

全ての児童と教師が遠巻きに見つめる中、一人の少年が体育館の冷たく固い床に膝を折り、無惨にもげたセクサロイドの首を、小刻みに震える小さな両腕に抱えていた。

「クローディア！ クローディア！」

既に機能を停止したセクサロイドの頭部を抱えた少年の目には、悲しみの色に染まった無数の涙が滝の様に零れ落ちていた。

少年の涙が、体育館の床を濡らしていた。

(了)

HP 【Blankfolder】

<http://blankfolder.huuryuu.com/>

<http://blankfolder.blog.shinobi.jp/>

Copyright(C) 2006-2007 【Blankfolder】 こりん, All Rights Reserved.

本ファイルの二次配布はご遠慮下さい。

本作品へのお問い合わせは上記 HP にて受け付けております。

本作品に対するご意見、ご感想は上記 Blog でもお受けしております。